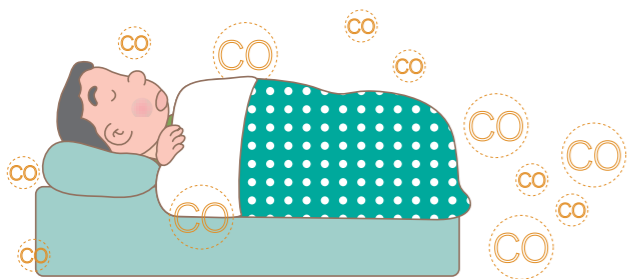


無色・無臭の一酸化炭素ガス。 気がつかない内に、部屋中にガスが充満！なんてことも・・・



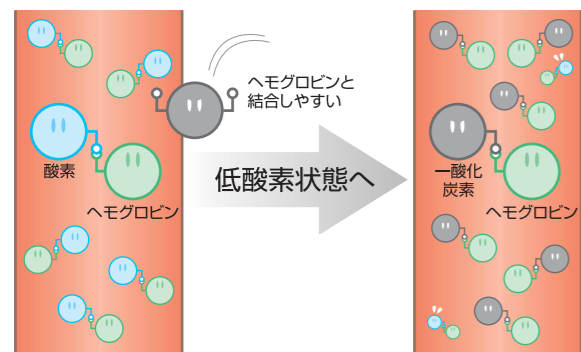
原因および仕組み

身近な室内器具から発生する、とても恐ろしいガス。

火災、暖炉、石油ストーブ、湯沸かし器やストーブなどのガス器具、練炭などで不完全燃焼すると一酸化炭素が増加し、空気の流れの悪いところでは一酸化炭素を多く吸い込むことにより中毒が起こります。また自動車の排ガスにも一酸化炭素が含まれています。現在の都市ガスの主流は天然ガスで、それ自体の一酸化炭素の含有は少ないようです。

一酸化炭素が体内に入り込むと身体が酸欠状態になります。

一酸化炭素は血液中のヘモグロビンと結合しやすく（酸素の200倍といわれている）、その結果酸素を結合したヘモグロビンが減少し、全身の組織は低酸素状態となります。一旦ヘモグロビンと結合した一酸化炭素は大気中では4～5時間かけて半減するため、体の低酸素状態が長引くことになります。

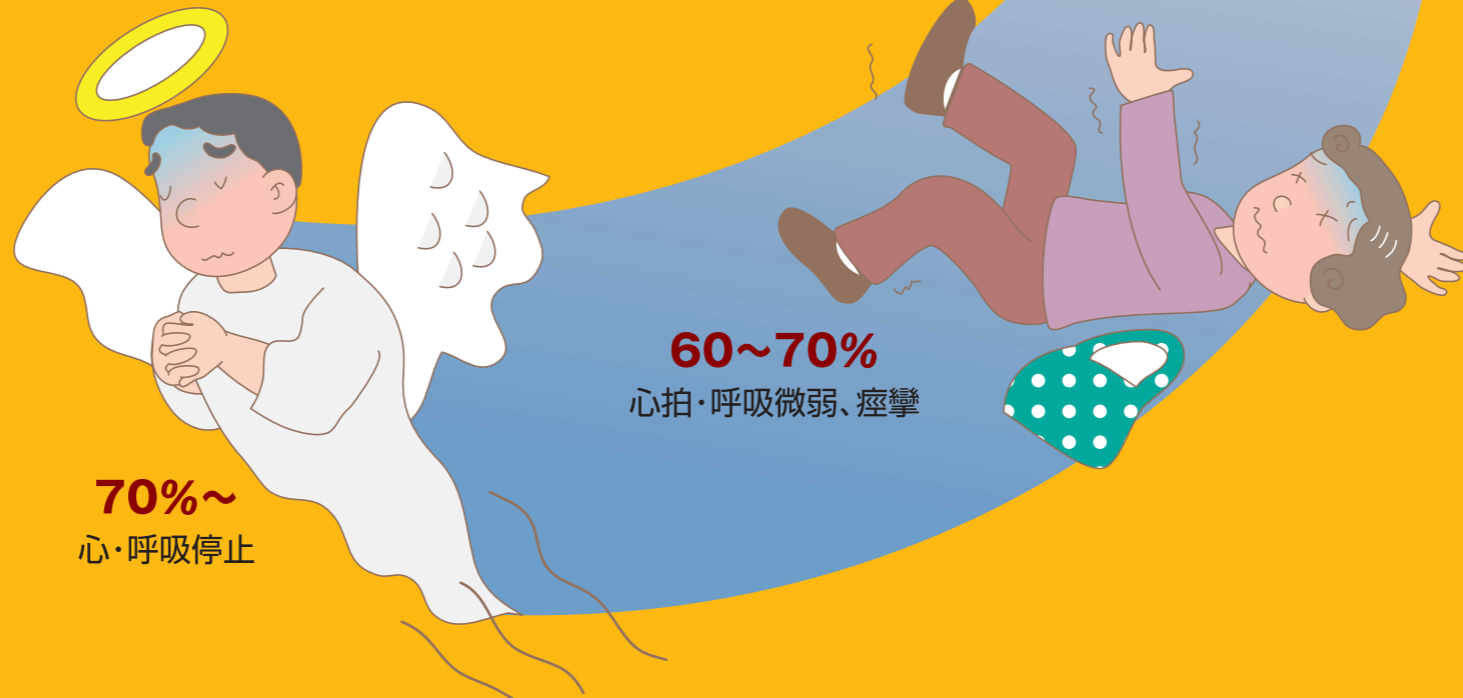


症状

気づかない内にもう手遅れ・・・
自覚症状には要注意しましょう。

軽度の一酸化炭素中毒では、頭痛、めまい、吐き気、嘔吐が起こります。さらに一酸化炭素の血液中濃度が上昇すると激しい頭痛、頻呼吸、昏睡、痙攣が起こり自力で動くことが出来なくなります。重度の中毒では、しばしば死に至ります。また一酸化炭素中毒から明らかに回復しても、数週間後に記憶喪失、排尿障害などの後遺症を残すことがあります。

一酸化炭素中毒の怖いところは、無色・無臭であるため初期は中毒であることを認識しないまま眠ってしまい、その後気づいても動くことができなく重度の中毒や死に至ることです。



診断

原因をしっかりと把握することが、
早期治療への第一歩

一酸化炭素中毒の診断は状況と症状、さらに血液中のCO-Hb濃度を測定し診断します。前記症状が出現した場所が閉鎖された空間や換気が悪い状況であれば疑ってみる必要があります。脳CT検査では脳浮腫や淡蒼球の低吸収域を認めます。ガス中毒には一酸化炭素中毒以外に二酸化炭素中毒、塩素ガス中毒、シンナー中毒、神経毒ガス中毒などがあります。最初にどの中毒かの判断は、周囲の環境や状況からおおよそ判断できると思われませんが、刺激臭や粘膜刺激があるかどうか大きな判断材料になります。

